ひと まち

子ども大学からノーベル賞受賞者を

「子ども大学かわごえ」は、子どもたちが抱く「なぜ？」という好奇心に応えたい、知的な世界を広げてもらいたいという願いから、平成20年に市民、大学教授などが連携して設立した学びの場です。

学生は、小学4～6年生の子どもたち。講師は、東京国際大学、東洋大学、尚美学園大学など市内の大学教授や研究機関の研究者など、それぞれの分野の第一線で活躍する人たちが務めます。授業は「なぜ電車の座席はすみからうまるのか？」「そばにある国際化・フランスの弁当と忍者」など興味をそそられるタイトルが並びます。講義を受け、専門知識に触れた子どもたちは、学ぶことの楽しさを感じたようで、理事長の酒井一郎さん（75歳）は「授業中、子どもたちは目を輝かせて講義に集中しています」と話してくれました。

学期は6月からの1年間。月1回行われる授業は、これまでに34回を数え、参加した学生（子どもたち）は延べ2849人。定員180人の枠から外れ入学できなかった子どもたちのために自治会連合会霞ケ関支部と協力して地域に根ざした授業を行う「かすみ教室」などを開講したり、通信教育事業を拡充したりする予定だそうです。

子どもが学ぶことを楽しみながら、子どもの学ぶ力を育て、生きる力や未来への夢を育むことが目標の子ども大学。「子ども大学からノーベル賞受賞者を」という酒井さんの夢の実現も近いかもしれません。

3月10日と11日、蓮馨寺（連雀町）で行われた子ども大学かわごえの学園祭「ミニかわごえ」は、遊びをベースにしながら社会のしくみを実体験する特別授業。目を輝かせた子どもたちが、まちに繰り出しました。

3月3日に伊勢原公民館で行われた、ジャーナリスト・池上彰さんの特別授業「お金が“商品”になった」のひとコマ（写真提供・子ども大学かわごえ）

まちのようす

まちには、放送局、学校のほか、工務店、アクセサリー工房、食べもの屋など店がたくさん。昨年は、前日に発生した東日本大震災のため急きょ中止に。今年は、午後2時46分に全員で黙とうをささげました。

選挙

初日に行われたミニかわごえ市長選挙。6人の候補者は、どんなまちにしたいかを話し、支持を呼びかけました。

ミニかわごえのあそびかた

①市民登録をします。
②入場料500円を払い、ミニかわごえ通貨10コエドを受け取ります。
③受け取った10コエドで食べたり、買ったり、遊んだりしてまちを盛り上げるか、仕事案内所で仕事を探します。
④仕事をします。給料は1時間で10コエド。そのうち2コエドは税金として税務署へ納めます。
⑤もらった給料で食べたり、遊んだり…。
⑥再び、仕事案内所で仕事を探します。

うどん屋さん

鈴木菜華さん（小学6年生・写真左）と大澤里奈さん（小学6年生・写真左から2人目）は「お客さんを呼ぶのは大変だけど楽しい。次はポップコーン屋さんをやってみたい」。

ネイルサロン

爪に飾りを付けてもらっていた福澄美宥さん（小学1年生・写真右）は、「爪がきれいになってうれしい。次は、わたあめ屋さんで働いてみたい」と楽しそう。

納税

アトリエ

中原悠ミニかわごえ市長（小学2年生）は、川合善明川越市長を案内。川合市長は早速、税務署で納税（左写真）。アトリエでは、川合市長が横断幕に書いた「望」の文字に2人でサイン（右写真）。

＊平成24年度の子ども大学の募集は、子ども大学かわごえホームページ（http://www.cuk.or.jp/）でお知らせします。

ひとまち ふおとニュース

さつまいもを活用して起業

創業意欲が旺盛で、将来性のある事業計画を持つ起業家を県が表彰する平成23年度の「いちおし『起』業プラン大賞」特別賞を、㈱いわたコーポレーション（新富町1丁目）が受賞しました。鳥越おかず横丁（台東区）の大学いも専門店から「のれん分け」し、平成22年の川越まつりの日に店をオープン。チーズケーキとさつまいものコラボなど、新しい味を積極的に挑戦していることが評価されました。手作りの味にこだわる社長の花俣準さん（53歳）は、「川越産のさつまいもを使った、地域で親しまれる味を作りたい」と話してくれました。

新しいアートスポット誕生

3月、三栖右嗣記念館が氷川町にオープンしました。同館では、川越市に本社がある㈱ヤオコーが所蔵する洋画家・三栖右嗣さんの作品150点余りから25点を常設展示。建築家・伊東豊雄さんがデザインした建物内部には、2つの展示室があり、それぞれ照明や採光の方法が異なります。また、自由に出入りできるラウンジでは、ミニコンサートや講演会などを今後予定しているそうです。

市はホームページに市内の美術館や博物館、ギャラリーなど美術作品の展示スペースの情報を集めたページを開設しました。お出かけの際はご活用ください。

ひとまち

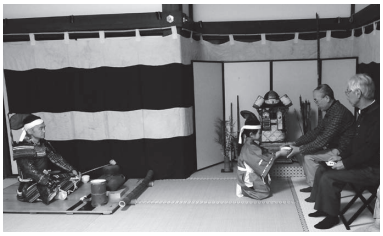
行って　会って　体験
気になるイベントや人を紹介

小江戸あるき

茶のまち川越を目指して

3月17日と18日の2日間、川越城本丸御殿や時の鐘、旧山崎家別邸など市内12か所に伝統的な茶席から誰でも楽しめる茶席が設けられ、多くの参加者でにぎわいました。

「茶あそび　彩茶会」と銘打ったこの催しは昨年に引き続き2回目の開催。本丸御殿でお点前を披露した事務局の寺田勝廣さん（68歳・石田）は「武士がお茶をたてる様子を再現しました。自己流ですが、楽しんでもらえるとうれしいですね」と話してくれました。甲冑姿の武士がたてた茶を直垂に烏帽子姿の子ども武者が運ぶと、参加者はしきりに写真に収めていました。



陽気な妖怪たちがもてなす旧鶴川座（連雀町）での妖怪茶席では、使う道具すべてが大きなサイズ。お化け茶わんで茶を飲むにも二人がかり。笑いの絶えない茶席でした。

また、県立特別支援学校塙保己一学園（県立盲学校）の生徒を茶席に招待。蓮馨寺の体験茶席に参加した秋元美宙さん（9歳・伊勢原町5丁目）は、初めての抹茶に「苦くてしょっぱいけどおいしい。お茶わんも手触りが気持ちいい」と興味津々。「お点前いただきます」の大きな声に緊張気味の茶席も和やかな雰囲気になりました。

川越茶発祥の地として知られる中院では、市制施行90周年を記念して、遠州流茶道の家元による献茶式が行われました。新座市から訪れた黒川伊津子さんは「めったに見ることができないので、いい経験ができました」と話してくれました。

事務局の桑島裕さん（53歳・富士見町）は、「茶所としての川越をもっと知ってもらい、西の京都に東の川越、といわれるくらいにしたいですね」と抱負を語ってくれました。